

—海外で活躍する獣医師 (XII)—

米 国 外 科 研 修 へ の 道

林 慶[†] (カリフォルニア大学助教授・小動物外科専門医)



1 はじめに

1993年に東京大学農学部獣医学科を卒業して以来今日に至るまで、アメリカで獣医外科医としての腕を磨くために日々研鑽を積んでいる。現在、カリフォルニア大学にて、外科医としてとても恵まれた環境で働いている幸運は、

これまですばらしい先生、友人に恵まれてきたおかげである。まだまだ修行中の身として何か書くというのはたいへんおこがましいのは重々承知の上、私のこれまでの経験を紹介してみたい。本稿は非常に個人的で偏見に満ちたものになってしまうが、お世話になった人々に感謝の意をこめるとともに、この情報が多くの人にとって何らかの役に立つものとなることを願う。

2 学生時代、米国で外科医を目指すことになったきっかけ

高等生物学に興味があり大学を選んだものの、大学の講義内容のレベルの高さに、大学入学初日より勉学をあきらめてしまった。子供の頃から、好きなものといえば、動物とアメリカンフットボールだったので、勉学にいきなりつまずいた私は、当然のようにフットボールの部活に没頭することとなる。わが母校には、“降年”という恐ろしい制度があり、あまりに成績が悪い者は“留年”ではなく下の学年に落とされる。現在と違い、当時、80年代には、わが校の獣医学科はまったく人気がなく、毎年定員割れの専攻学科であった。授業に出なくても自動的に2年生になれ、どんなに点数が悪くても獣医学科に行きたい(行ける)ので、まあ大丈夫であろうと高をくくっていた私の考えは甘かった。教務課で“君は降年だよ”一笑に付され、“獣医学科はどうせ大幅に定員割れじゃないか、入れてくれ”と食いが下っても、門前払いされたのを今でも鮮明に覚えている。こんな事情で、人よりちょっと余計に教養を積み、何とかぎりぎりで獣医学科に進学したが、そこでの授業のレベルはさ

らに高く実習の義務も多いのでまた困難にぶち当たった。私にとって獣医学は学問として漠然としており、自分は開業する意思もなければ、研究者として一生まっとうすることにも魅力を感じていなかった。そのため、私の目的意識は低く、同級生たちも同じように悩んでいたのを覚えている。彼らはいずれ基礎生物学の中に目的を見つけ今や世界の一線で活躍しており、専門こそまったく違うものの、石川、池田、新里、高森、種村、前田らの国際的な活躍はわがことのように嬉しい。

そんなダメ学生だった私が、外科医を目指そうと思ったきっかけに大きな影響を与えた幾つかの瞬間を思い出す。今はどうか知らないが、当時、獣医学科の学生は、まずホルマリン漬けの犬の解剖という、長くて臭い洗礼を受けるのが慣習であった。フットボール部の最上学年として毎日練習中心の生活をしていた私は、絶対必須のこの実習をさぼり始めた。これを見かねた解剖学教室の伊東助手は、なんと時間外に個別に解剖を指導してくれたのである。伊東助手は外科出身でそのメス捌きはすばらしく、この経験が外科医を意識する第一歩になったといえる。また微生物学実習も必須であったが、ここでも当時の見上教授が、“お前はフットボールがんばりなさい”とおっしゃられ、私のおさぼりがある程度大目に見てくれた。ご自身もラグビー部出身で楕円形の球技には甘かったようである。たまに実習に出ているときには率先してウサギの心臓採血などを受け持ったが、そのとき“手さばきが効率的で度胸もよろしい”とほめられ、外科医を職業として意識したのを覚えている。また、ありがちではあるが、フットボールによって骨折を3回、整形外科手術を1回経験していたため、なんとなく外科医にあこがれもあった。曖昧な気持ちで獣医学科に入ってきた私は、こんな感じで外科学教室に入室することを決意するに至った。(ちなみに、東京大学アメリカンフットボール部は、その年めでたく関東2部リーグを制覇しそれ以来、今日に至るまで、伊藤公一の活躍などもあり、ずっと関東1部リーグで活躍している)。

[†] 連絡責任者：Kei Hayashi (Dept. of Surgical and Radiological Sciences, School of Veterinary Medicine)
2112 Tupper Hall, UC Davis, One Shields Ave, Davis, CA 95616 U.S.A.
TEL +USA (530)752-2425 FAX +USA (530)752-6042 E-mail : khayashi@ucdavis.edu

3 獣医外科学研究室と留学決意の経緯

あまり具体的な内容は考えずに外科学教室を選んだが、入室早々、当時の竹内教授、佐々木助教教授の外科学における厳格なプロフェッショナルリズムに圧倒された。また早朝から夜中まで手術、実験、そして無限の雑用を黙々とこなしていく西村助手と廉澤助手、何も知らない私に臨床、研究ともに厳しく優しく直接指導してくれた河村美奈先輩、中市先輩、金先輩、森実先輩、松永先輩、そして家畜病院で3年ほど寝食をともにした望月、牧野両先輩など、多くの人に影響を受け、ますます外科道にのめりこんでいった。とにかく手術に興味があり、3年生の身でありながら器具出し、足持ち、鉤引き、前立ちまで経験させてもらった。1日に何件も幅広い分野の手術を精力的にこなしていく佐々木先生、頭もメスも切れ味抜群の西村先生、決して妥協せず徹底的に手術に取り組む廉澤先生、たくさんのことを盗んで学び、どうしても腕のいい外科医になりたいと野望を抱くようになった。もうその頃には完全に病院に住みこんでいて、同室同期の心優しい釜田と大道は経済的に困窮していた私に犬舎掃除バイトを全て譲ってくれた。国家試験を通ったばかりの望月先生とは家畜病院で共同生活をしながら、毎晩、進路の相談にのってもらっていた（お返しに恋の相談にのってあげた）。同病院の当時の長谷川教授、小野助教教授、後飯塚助手、亘助手、辻本助教教授、大野先輩、嶋田先輩、牛屋先輩、それから同じ夢や悩みを持つが私よりずっと賢い同期の桃井と鹿野、実にたくさんの人に影響され、臨床、研究、教育の全てに一流になることを目指したいと思うようになる。

こうして3、4年生を毎日忙しく過ごしていた私は、ある雑誌に、ニューヨーク、アニマル・メディカルセンターの南 毅生先生によるアメリカの専門医制度に関する記事を発見した。そしてアメリカには獣医大学卒業後、インターンを経て外科の専門医になるためのレジデントという制度が整備されていることを知る。すぐにこれが私のやりたいことだとわかった。さらに同じ頃、種子島貢司先生によるアメリカの大学、特に外科専門科への訪問記事を読んだ。当時、日本興業銀行（IBJ）の社会人フットボールクラブチームに参加していた私は、そこでの仲間のアメリカ大学院ビジネス留学にも影響され、卒業後は留学しようと決意した。大学4年生の夏休みを利用して、カリフォルニア大学デービス校、ニューヨーク、アニマル・メディカルセンター、ペンシルバニア大学などを貧乏旅行で単身訪ねて歩いた。この旅の前に、桑島先輩が東京大学の前の公衆電話からニューヨークの南先生に連絡を取ってくれたのをよく覚えている。ニューヨークでは南夫妻が私の将来の夢にとて親身に相談に乗ってくれたことを今でも感謝している。この旅の刺激的な体験でさらに留学の決意は固まった。

私は幼少時に横浜でアメリカ文化に少々触れたこともあったし、アメリカの中学校（オバマ大統領の母校）に通ったことのある兄の影響などもあって、卒業後の米国留学は正しい選択のように思えた。だが何よりも、希望が本当に実現したのは数々の幸運に恵まれていた結果としか言いようがない。タイミングのいいことに、5年生の春、竹内教授を中心として、日本獣医麻酔外科学会が初めてアメリカの外科専門医団体（ACVS）から正式に専門医を講演に招待することになったのである。ある日の夕方、竹内先生に呼ばれ、“君が留学を希望していることは知っている、ただし現実には甘くない、今度アメリカの先生が来るから、彼らにいい印象を与え、しっかりとコネを作りなさい”と提言された。ウィスコンシン大学のDr. RosinとDr. Dueland、そしてヴァージニア工科大学のDr. Whiteが来日され、私は必死になって彼らのお世話をするとともに、卒業後のアメリカ留学の意思を告げた。

その年の秋に早速、親から借金して、再度アメリカの大学を周遊した。まず最初に訪ねたウィスコンシン大学での、Dr. Rosinと交わした会話は一生忘れることができない。“外科医の研修のためには公式なレジデント制と、非公式のフェローなどがある。理想的にはレジデントを修了し、正式な専門医の資格を取るのがよいだろうが、英語もろくにしゃべれない外国人でインターンの経験もない君にチャンスはゼロである。フェローというような形で数年経験を積むのもよい。ただし君が本気ならば、まずはアメリカで何らかの実績を作り、名前を売って強力な推薦状をもらってから、レジデントに挑戦してみてはどうか。”と紙に丁寧に書きながら説明された。Dr. Rosinは、大学院でPhD（博士号）を取得し（5年間）、1～2年の臨床フェローかインターンをしてから、レジデント（3年間）に応募するという、長期（計10年）の正攻法プランを推薦された。このプランが記された紙は今でも大事に保存してある。結局、このときにDr. Rosinが示してくれた道すじを私は正確にたどることになる。

実際にアメリカを訪れてみて、いきなりレジデントに応募することは無謀で無意味なことがわかった。さらにDr. Rosinは私に、新進気鋭の整形外科研究者Dr. MarkelのもとでPhDをすることを勧める。Dr. Markelは、“君が本当にやる気があって優秀ならば、そして僕の下で働くならば、PhDは3年、インターン1年、レジデント3年、計7年で終わらせることは可能だ”と、Dr. Rosinが提案してくれた当初のプランにペンでさらさらっと修正を加えた（結局そこまで優秀でなかった私は、計9年かかったが）。これで目標がはっきりした。この出会いに勇気付けられ、ウィスコンシン大学大学院を第1希望とし、大学院入学への手続きを本格的に開始した

のであった。

この旅から戻ってから、アメリカ大学院への願書と必要な書類、つまり各試験の得点証明、大学の成績と卒業予定証明書、推薦状、そして受け入れ先の同意を記述した手紙などを準備した。アメリカの大学院には獣医関係のプログラムは少ないので、ウィスコンシン大学以外、滑り止めで3校のみ（カリフォルニア大学デービス校、コーネル大学、ペンシルバニア大学）に出願した。その間、相変わらず、家畜病院に寝泊りしながら、卒論の実験を一所懸命こなし、症例検討会には必ず出席した。アメリカに行くまでにできるだけのことを学んでおきたかったのである。卒論の発表が終わってから、国家試験の勉強をだらだら開始したが、柳沢先輩に“そんなんじゃ国家試験落ちるぞ”と本気でしかられた。留学や将来の夢の達成には日本で獣医師免許を持っていることは不可欠である。柳沢先輩と高橋秀児先輩に特訓をしてもらって、おかげで無事に国家試験にも通り、そして1993年3月に卒業、あとはアメリカの大学院合否の結果を待つだけであった。アメリカの大学院は9月まで始まらないので、卒業後、4月からは東京大学大学院博士課程に所属し、引き続き臨床と研究の論文投稿に従事していた。この間は、入学選考結果を待つ浪人のような身でありながらけっこう楽しく過ごし、アメリカ行きに備え、親跡先輩と伊東輝夫には日本酒の特訓をしてもらい、後輩の清水と山木にはなぜかボクシングと格闘技の特訓をもらった。

そしてついに、5月のある日、病院の講義室で望月先生の結婚式のための余興としての創作ダンスを片山先輩と釜田と半裸で練習している最中、佐々木先生がウィスコンシン大学院の合格通知を持ってきてくれたのであった。変な格好をして踊っている最中だったので、とても恥ずかしかったり、とても嬉しかったり変な感じだったのを覚えている。しかし、ウィスコンシン大学院の入学許可書をよくみると、“Admission”のあとに“(on probation)”と書いてある。つまり、“条件付入学許可”とあるではないか。どういうことかと読み進めると、“本来であれば大学の成績が悪すぎるのでとても入学は許可できないが、指導教官のリクエストにより、特別に仮入学を許可する。ただし、最初の2学期間、成績を全てAをとらないとその許可を取り消す”と書いてあった。それも当然である。アメリカの一流大学院は通常、4点満点評価で、平均3.5が入学の最低条件である。先述のように、大学生活をオール可で超低空飛行して来たいんちき学生の私の平均点は、前代未聞の2.7であったのである。

4 アメリカ大学院留学、まじめな学生生活

ウィスコンシン大学はアメリカ北部、五大湖や大都市

シカゴの近郊、人口約50万人の中都市、州都マディソン市に本拠地をおき、公立大学としてカリフォルニア大学、ミシガン大学に続き、全米第3位にランクされる名門校である。獣医科大学がPhDのプログラムを持つのは全米でもここだけである。アメリカの大学院では、たとえば免疫学であるとか分子生物学というような専門分野によりプログラムが規定され、一般的に獣医学というようなくくりは存在しない。幸いなことにウィスコンシン大学大学院には獣医学に即した、比較生物医科学（Comparative Biomedical Sciences、以前はVeterinary Scienceと呼ばれていた）という、比較的臨床医学に近いプログラムが存在した。大学院というのは完全に研究目的の機関であるので、臨床獣医学にも触れていなかった私には理想的なプログラムであった。理系大学院の場合は、始めに大学院レベルの授業を、さまざまな分野から履修し、そして後半に自分のプロジェクトの結果を論文にまとめて卒業するのが一般的である。日本の大学院との違いは、履修する授業が“本気の授業”であるという点と、その選択はキャンパス内のどのプログラム（学部）から幅広く履修してもいいという点である。授業は真剣で、受講者は一人も授業を休まず、授業中は誰も居眠りはせず、毎週宿題提出があり、中間試験、期末試験がしっかりあるのだ。アメリカの大学院はあまくなかった。

固い決意を胸に1993年8月に渡米したが、実は、それからしばらくの間は、大変苦勞した時期が続いた。ウィスコンシン州マディソンは中規模な都市だが、大学町で国際色に富み、アメリカの都市としては文化度が非常に高い。冬は恐ろしく寒いが、湖と森に囲まれた美しい町で、犯罪もほとんどなく、1993年に私が到着した週に、Moneyという雑誌によって、全米で住みよい町の2位にランクされた（翌年には全米1位）。そんなすばらしい環境でのアメリカ生活のスタートではあったが、大学院生としての生活はつらく厳しかったのが現実である。英語に関する一般的な苦勞は当たり前として、大学院の授業やセミナーについていくのに必死だった。とにかくAをとらないと退学になってしまうので、死に物狂いだった。幸いなことに、研究の方は指導教官であったDr. Markelが計画性を持って確実に導いてくれたので順調に進んだが、それに応えるように夜も週末も研究室に通った。また臨床にも常に触れていたので、毎朝の症例検討会にも出席した。ほとんど寝なかったし遊んだ記憶はまったくない。年収も1万4千ドル（150万円程度）で最低限の生活をやりくりし、唯一の楽しみは毎週土曜日の大学フットボールをみることだけであった。とにかくなるべく早く実績を挙げなくてはいけない、そしてこの先どうしてもレジデントに選抜され専門医になりたいという、強い意志（というよりは意地）の

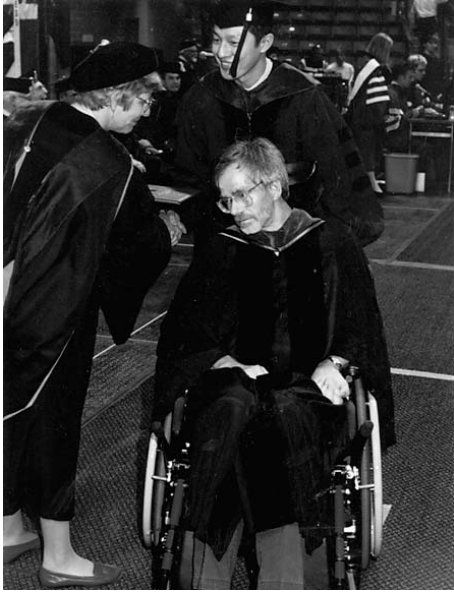


図1 大学院卒業式、PhDの授与は指導教官とともに壇上に上る。ALS（筋萎縮性側索硬化症）で麻痺が進行中の恩師 Dr. Rosin.

ために、つらいことも耐えていたのだと思う。個人的には、アメリカ大学院留学は、お金と英語に不自由しない人にしか勧められない。渡米から1年でまずMS（修士号）を取得した。

そんなつらい毎日であったが、常に人には恵まれていた。Dr. Rosinは私を家族の一員として迎えてくれ、さらに獣医大学の外科実習の助手として採用してくれたので、大学院生に課される教育義務の単位を効率的に取得することができた。Dr. Ken JohansonとDr. Manleyは、私が臨床にも興味があることを配慮して、時間が許すかぎり、実際の患者の手術の助手をさせてくれた。同じ研究室で仕事したPeter Hanson, Mondy Lopez, Liz Pluhar, Peter Muirは、遠い東洋の国から来た何も知らない外国人留学生の私を弟のように面倒見てくれた。ともに苦労した同門の彼らは今、みな最前線で活躍中の有名人となっている。医療用レーザーなどの関節手術の新技术の解明を目的とした研究は、ちょうど時流に乗って順調に進み、比較的早く実績をあげることができたので、*In Vivo*のデータをウイスコンシン大学PhDの論文に使うことにし、*In Vitro*の部分の研究成果を東大の博士論文の審査に提出した。東大の博士論文審査にあたって、多大なご尽力をいただいた佐々木先生、アメリカで研究をしたという特殊な事情にもかかわらず、審査を快く引き受けてくださった、東京大学大学院の林先生、土井先生、小野先生、西村先生に本当に感謝している。

ウイスコンシン大学でのPhDの審査は何段階かに分かれており、前半は授業と研究だが、後半に向かって

は、資格試験、実験計画書提出、口頭発表、そして最終審査などのステップを一つ一つクリアしなくてはならない。これらのうちで最終審査Defenseはその名のごとく、5名以上の教授たちが次々自分の専門の質問をして攻めてくるのを、必死で答えて自分の研究と尊厳を防御するという、3～5時間に渡る密室における通過儀礼だ。1997年に、PhDを最短の3年半で終えることができ、卒業式は闘病中のDr. Rosinと一緒に出席した（図1）。そのときの招待講演者のダライ・ラマ師がわれわれに向かって合掌されたのを覚えている。

5 臨床研修の開始、語学力が命

PhDの修了が射程距離内に入った頃から、少しずつ次の目標である臨床研修のための準備を始め、まず必要な獣医師免許を、ウイスコンシン大学のEndorsement（保証）のもとで各試験を受けるなどして、1年ほどかけて1997年に取得した。この制度は現在廃止されたので、廃止前に正式免許が獲得できたのは幸運であった。そして、PhD取得後、ウイスコンシン大学獣医教育病院の病院長のDr. McguirkとDr. Rosinが私のために特別にインターンのポジションを設けてくれたのである。この特例インターンは無給のポジションだったので、Dr. Markelのラボで引き続きポスドク（フェロー）として働き、生きていくのに必要最低限の収入が得られたのも幸運であった。しかし、私の場合、インターンといっても、実力は学生よりも下で、当初ははっきり言ってまったく使い物にならなかったと思う。まず、日本では臨床獣医学を系統的にまじめに勉強してこなかったのも、特に内科学の知識と経験は乏しかったし、大学院に通っていた4年間のブランクは大きく臨床のカンが鈍っていたし、そして何よりも臨床に必要な完璧な口語の米語が話せなかったために、いつも惨めな思いをしていた。飼い主や学生に質問されると、ポケベルが鳴ったふりをしてあわててトイレに駆け込み、大使用個室でポケットに忍ばせた小型の本を必死にめくって探し物をするのが日常であった。明らかに飼い主に信用されていず、また明らかに学生に馬鹿にされているのがわかるのも屈辱だったが、自分の力がないので仕方ない。学生たちには（あまり上品でない）生きた英語をよく教えられたが、それでも臨床に必要な語学力には不十分で、言葉の大切さがつくづく身にしみた。また、インターンとして複数の専門科の臨床経験をさせてもらうわけだが、外科屋の私にとって、内科研修8週間というのはまさに地獄で、もう夢あきらめちゃおうかな、とまで思った。このような形で、インターンとポスドクという2つのポジションを掛け持ちでやりくりし、2年かけてやっとレジデントに応募できる資格が得られた。その間、私のインターンアドバイザーでアメリカの親代わりであったDr. Rosinは闘

病生活を送られていた訳だが、私のレジデント合格の日をみることなく、彼の呼吸は1999年6月9日に止まってしまった。57歳だった。

臨床研修に一步踏み出したこの時代にも、思い出に残るたくさんのお会いがあった。同じ時期アメリカで同じ夢を追ってともにがんばっていた、相川 武先生とは今でも飲み（過ぎ）友達である。インターン時代、私を指導した腫瘍学のDr. MacEwenを訪問された石井義和先生、廉澤先生、丸尾先生とはよく食事をしたし、辻本先生にいたってはいつも我が家でワインをたくさん飲まれていた。オハイオのAOコース（整形外科の講習会）で、横浜の永岡先生と初めてお会いし、その知識と経験の深さ、最新の文献に全て目を通されているという勤勉さ、そしてそれらを理解した上で自分で手術法を開発するという独創性にまさに度肝を抜かれたものである。

6 ウィスコンシン大学での外科レジデント(研修医)

非公式インターンとして1年以上、アメリカで免許を持った身分で臨床経験をし、Dr. MacEwenをはじめ内科系の著名な先生に推薦状を書いてもらい、そして大学院時代に蓄積した論文功績などにより、レジデントに応募しても現実的に選ばれる可能性がやっとでてきた。そんな折、公私ともに師匠と仰ぐ整形外科医のDr. Manleyに、“ここにはもうずいぶん長いこといるから、そろそろ外の世界に出て修行をしてきた方がよい”と言われる。できれば最高の外科教育を受けるためにウィスコンシン大学に残りたかったが、師の提言はもっともであった。アメリカでは一つの場所にずっと居残るということはまずない。小動物外科レジデント選考ではその倍率があまりにも高いので、いったいつ選ばれるのか、選ばれるとしてもいったいどこに行くのかなどまったく予想がつかない。一つのポジションに対して約100名の応募がある。プログラムは北米で約25ほどあり、何校に応募しても構わず、普通、志願者は全てのプログラムに応募する。私の場合、せっかくここまで苦勞して準備してきたのだからできれば良質のトレーニングを受けたいと思い、志望校のリストをしばった。整形外科で有名なミシガン州立大学とオハイオ州立大学に応募するのはすぐ決まったが、名門といわれる東部私立大学のコーネル大学とペンシルバニア大学は外科に弱いので応募しなかったし、コロラド州立大学とミズーリ大学はすでにPhDを持っている私にもMSを履修することを要求したので応募しなかった。南部の学校には不安があったし、タフツ大学やワシントン州立大学のような人里はなれたところは症例数の心配があったので応募しなかった。カリフォルニア大学は一般公募していなかったので応募できなかった。このようなわがままな事情で、結局、“ビッグ10リーグ”所属のミシガン州立大学、オハ



図2 レジデント時代、師匠Dr. Manleyと関節鏡手術などの最先端医療を目指す。

イオ州立大学、パーデュー大学、ミネソタ大学、イリノイ大学のわずか5校と、ウィスコンシン大学の計6校だけに、12月1日の締め切り前に願書を送った。次にマッチングプログラムという選抜制度のために、1月5日までに、志望順位を決めなくてはならない。心の中では、ミシガン州立大学を1位にしようかなと思っていた新年早々、師匠のDr. Manleyに突然、“約100名の応募者の願書を外科教員全員で審査した結果、おまえの客観的スコアが1番高かった”という事実だけを伝えられた。これは“ここを1位に指名すれば選考される可能性が高い”と暗にほめかしたいのだと解釈した。ものすごく悩んだが、急遽、ウィスコンシン大学を第1希望に変えて順位を提出した。待つこと数カ月、3月1日に、マッチングプログラム管理団体から、“おめでとうございます。ウィスコンシン大学のレジデントに選考されました”と電話があった。1年以上もかけて準備して、どこへでも選ばれた学校へ行く心積もりであったのに、結局もとの居場所に残ることになったのである。

念願のレジデント生活は、体力的には辛かったが充実していた。レジデント生活の印象を簡潔にまとめると、英語が飛躍的に上達した、ほぼ毎日手術をした、夜中に何度も起こされた、という感じである。レジデント制は、レジデント自身のためのトレーニング以外に多くの義務が科されていて、教官の役割も負う。主な義務は病院での診療活動と学生の教育だがそれ以外にも、ゼミや検討会をまとめたり、カルテ記録に多くの時間を費やすため1週間のうちほとんどの時間を病院で過ごす。また常にポケベルの携帯が義務付けられているためいつでも“オンコール”の状態である。手術数は平均して1年間でレジデント1人当たり約300例の手術症例を担当する(図2)。外科レジデントは3年間の間に、少なくとも神経外科40、胸部外科20、消化器外科50、腹部外科10、泌尿器外科35、頭部/頸部外科25、形成外科35、そし



図3 ミシガン州立大学助教授のころ、レジデントは修了したもののまだまだわからないことばかりで、小動物整形外科の母、Dr. Floにいつも相談していた。

て整形外科130例を執刀することが要求される。ウィスコンシン大学では外科症例数が多いため2年目修了時までにはこの規定をクリアできる。レジデントとして周りからの評価も高く、やりがいはあったが、腎移植の患者がICUにいたり、椎間板手術が夜中に入ったりすると、夜も寝ずに翌日も働かなくてはいけないのは、年齢的に辛かった。3年間の間、Dr. MacNulty, Dr. Bjorling, Dr. Hardie, Dr. Manley, Dr. Linn, そしてDr. Muirと様々なバックグラウンドを持つ、経験のある外科医に一貫した教育を受けられたのは、外科医として育つのに重要な環境であったと思う。レジデント中いつも面倒を見てくれていたDr. MacEwenが心臓発作で急死されるなどの不幸にも見舞われたが、3年以内にレジデント課される全ての要求を終え、2003年6月にレジデント研修を無事修了できた。長い道のりであった。

7 専門医試験とミシガンでの外科教官としての経験

レジデント3年目、そろそろ就職先を考え始めた頃、また思いがけない幸運に恵まれた。レジデントに応募しているときにとても行きたかったミシガン州立大学の学部長で外科医のDr. DeCampとヨーロッパ、ミュンヘンの学会で同席し、“レジデント修了後、ミシガン州立大学に整形外科の助教授として来てみないか”と誘われたのだ。この上なくありがたいお話であったので、即答でインタビューの日程を決めた。2月の真冬日、ミシガンへ向かうシカゴ経由の飛行機が欠航し、午前中に着くはずの予定が夜8時まで着けないという大変な事態に陥ってしまったが、それでも外科の教授が全員待っていて、私のためにディナーの場で面接をしてくれた。そして2週間後に採用の通知が届いた。日本に帰って就職することも考えたが、これから受けなくてはならない専門医試験に合格するためにはアメリカに残った方がよいと判断した。ミシガン州立大学といえば、Dr. Brinkerの



図4 獣医卒後教育の視察のためにウィスコンシン大学を訪問された竹内先生と、アメリカ永住権（グリーンカード）申請のための推薦状をお願いしたが、それが完了した直後に意識を失われ帰らぬ人となった。

功績と小動物整形外科の歴史を作ってきたこと有名な学校で、Dr. Flo, Dr. Braden, Dr. DeCamp, Dr. Probst, Dr. Dejardinというそうそうたるメンバーに、私は6人目の整形外科教官として加わることになった。レジデントは修了したものの、まだまだ経験不足で未熟者の私は、このミシガン州立大学で若手教官として、5人のベテランに温かく見守られながら、整形外科医として大きく成長したと思う。とにかく“切り”まくり、小動物整形外科を年間400例ほど執刀した（図3）。そのころ、アメリカの永住権（グリーンカード）の応募のための推薦状を書いてくれた竹内先生は、あとは署名するだけというところで、意識不明になりそのまま亡くなられた（図4）。

2003年の、11月より3カ月間は専門医試験のための受験勉強に当てられた。外科の教科書を端から端まで全て読み、過去5年間の外科関係の論文を全て読んだ。20時間程、ぶっ続けて倒れるまで勉強し、10時間ほど起きるまで寝続け、そしてまた倒れるまで勉強する。こんな生活を3カ月続けたおかげで、社会性は失われたが、相当賢くなった。専門医試験は3日間に渡る筆記と口頭による拷問のようなもので、ほんの30%しか合格しない。試験会場は、陽光眩しいカリフォルニアのサンディエゴであったが、われわれ受験生にはそれを楽しむ余裕すらなかった。試験は予想通り手強く、特に口頭試問は惨憺たるものであった。あの経験は今でも思い出したくない。確実に“落ちたな”という手応えを噛み締めなが



図5 カリフォルニア大学デービス校にて、トラの肘の関節鏡。このような特殊手術はまれに専門医に依頼される。



図6 カリフォルニア大学デービス校にて、学生、レジデントに手術を指導する日常風景。

ら、とほとほと極寒で曇り空のミシガンへ帰って行ったのを覚えている。2週間後、ACVSから結果通知の封書が届いたが、緊張のあまり、手と足が震えてうまく開封できない。封筒をぐしゃぐしゃにしながら、やっと中の書類を取り出したが、目が回って内容が読めない。なんかぐちゃぐちゃ書いてある英語の中に“Congratulations”の文字を見つけた瞬間、自然に右手で力強くガッツポーズを取って“やった！”と日本語で叫んだ。ついに専門医になれた。本当に嬉しかった。

8 最後 に

このあと2005年に、カリフォルニア大学へ迎えられ現在に至る。小動物整形外科領域において、臨床、教育、研究に貢献しながら多忙な毎日を過ごしている(図5)。できるだけ数多くの難しい整形外科症例と対決すること、私がこれまで数多くの人に与えられた恩恵を今度は私が弟子たちに与えてあげることを、日々の目標にしている(図6)。趣味といえば、最高の外科医になるため、新しい技術を学ぶため、世界中の名手を訪ねて歩く



図7 南カリフォルニアで活躍する親友のDr. Holsworthと、難易度の高い膝関節鏡手術を学ぶ。



図8 カリフォルニアにてDr. Brueckerと、これまで困難とされた肘関節全置換術を、開発者のもとで学ぶ。



図9 ミズーリ大学にて、Dr. Cook, Dr. Foxらと、骨軟骨移植という新しい治療法をともに執刀する。



図10 カリフォルニア大学デービス校にて，乱雑なオフィスを訪問して下さった望月先生。

ことであろう（図7～9）。そしてこれまでの経験をできるだけ日本の獣医界にも還元できるように努力しているが，そのために望月先生をはじめ，佐々木，西村先生ら数え切れないくらい多くの方々にお世話になっている（図10）。

本稿に記したように，ここにくるまでたくさんの幸運に恵まれてきたが，その間，何人もの恩人の死に遭遇した。その度に，ああ，俺はこの人たちの運を吸い取っているのかと愕然としたこともあった。まだまだ修行中でこれから達成したいことはたくさんある。母には丈夫な体に産んでもらった。父には常に謙虚にと教えられてきた。これからも向上心を持って努力を続けるつもりである。最後に，わがままな夢と厳しい海外生活を支えてくれた家族，けいことぶうたろうに本当に感謝したい。